

人々が集い、
語らう日常を
守っていききたい

かみじ島、なかじ島、しもじ島
上甕島、中甕島、下甕島の3つの島からなる甕島。カノコユリの原生
地や豪壮な海食崖、特異な湖沼群といったほかでは見られない豊か
な自然景観が評価され、平成27年3月に国定公園の指定を受けた。
この島で、手作りの豆腐や甕島の特産品などを販売している東シナ
海の小さな島ブランド(株)代表取締役の山下賢太さんに、甕島の魅
力や国定公園指定によって期待していることなどを伺った。

東シナ海の小さな島ブランド株式会社

代表取締役 **山下賢太**さん

Kenta Yamashita

農業をはじめとして さまざまな事業を 展開されていますね

甑島で生まれ育ち、中学校卒業後に騎手を目指して競馬学校に進学しました。残念ながら学校は中退してしばらくキビナゴ漁の漁師として働き、その後京都造形芸術大学に進学して地域デザインを専攻。民間企業を経て24歳の時に帰郷しました。ただどこに行っても、ふるさとである甑島の思いだけは変わらなかったですね。大学での研究テーマもいつも甑島で、先生に『また甑島か』と言われるほどでした(笑)。

帰郷後、2010年に個人商店「山下商店」を設立して、島で取れた米や島の素材を使った加工品などをイベントや通販サイトでの販売を始めました。農業の経験はそれまで全くありませんでしたが、生まれ育った島に恩返しがい



たいという思いが僕を支えていました。

これは今も現在進行形の問題ですが、当時から島では高齢化や過疎化が進んで耕作放棄地が増えていました。それらを再び耕し、稲が豊かに実る風景を取り戻したい。そして若い人が島を出ていなくても働ける環境を作ってほしいという気持ちが強くなりました。その思いは今でも変わっていません。

現在は株式会社化し、社名も「東シナ海の小さな島ブランド社」に変更しました。2年前には豆腐の製造販売も始めました。もともと氷屋として地域の方々に親しまれてきた場所を改装して、豆腐のほか加工品なども販売しています。子どもの頃、鍋やボウルを持って近くの豆腐屋へ買いに行くのが僕の仕事でした。その頃の豆腐屋はすでにありませんが、今近所の方が同じように豆腐を買いに来てくださいる風景を見るとものすごくうれしいですね。ここには観光客の方も来てくださるので、そこで地元の方との会話が生まれたりしています。そんな地元の方も観光客の方も集い、ゆるやかにつながり合える場所になっていけばいいと思います。

さらに今年3月からは、新しく宿もオープン。もともと宿泊業もしたいと考えていて、昨年10月に閉館した船宿を借り受ける形で始めました。自家製豆腐や、島の旬の素材を使った料理などを楽しんでもらっています。

国定公園指定について どう感じられましたか？

もちろん、今回のことをきっかけに、もっとたくさんの方が甑島について知っていただきたいですし、興味を持ってもらうことを期待しています。もともとそれくらいのポテンシャルはあると感じていたもので、やっとならぬ価値を認めてもらえたのかなと思います(笑)。僕は島を案内するガイド業務も行っており、甑島の美しい景観を守っている人々の営みを知ってもらうための活動というのを、これまでずっとしてきたつもりなので。

僕には今でも忘れられない、子どもの頃に見た原風景があります。それはアコウの木の下に地域の方が集まり、他愛もないおしゃべりをしてゆつくりと時間が過ぎていく、そんな風景です。その木は僕が17歳の時に移植されて道路ができたのですが、やがて地域の人が集い、語りう場所自体が少しずつなくなってきました。

そんななくなりつつあった風景を、再び日常の中に取り戻したい。地域の方が地元を誇りを感じられるように、そして島の魅力をさらに高めていけるような場を作っていきたいです。

甑島に対する思いが 活動の原動力なのです

甑島の里町には玉石垣という、独特の文化があります。年間を通じて強い甑島では、家の周囲を高い玉石垣と生け垣で囲っていました。これは自然とともに生きてきた人々の暮らしや島の歴史を物語る景観であり、象徴でもあります。この風景は国土交通省が認定する「島の宝100景」にも選定されました。

僕がずっと守っていきたいと思うのは、まさにこの玉石垣のように島で暮らす人々の営みやその風景そのものです。この風景を守っていくためには、きちんと経済と結びついていなければなりません。人やもの、場所が仕組みとして成り立っている風景をしっかりと作り、伝えていく必要があると感じています。

起業する際に強く感じた、島に恩返ししたい気持ちは今でも全く変わっていません。島のためにやりたいことはまだまだたくさんありますし、できることもまだまだあると信じています。



豆腐を買いに来た地元客と笑顔で接する山下さん